

企画展 いしかわの工芸 文化の深み ~わざの美 表現の美~



前大峰《沈金花壇文飾箱》

—「いしかわの工芸 文化の深み ~わざの美 表現の美~」より—

- 就任ご挨拶（館長 青柳正規）
- 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅱ  
【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 特別陳列 きらめく美  
北陸ゆかりの<sup>きりかね</sup>截金作家たち【近現代工芸】
- 石川の文化財Ⅱ【古美術】
- 人物画の世界【近現代絵画】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】



青柳正規館長

- 11月前半の展覧会
- 11月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

# 就任ご挨拶

館長 青柳 正規

いまから五十年ほど昔、イタリアのローマ大学に留学していたとき、ステイツベルト美術館というフィレンツェの市立美術館を訪れる機会に恵まれた。古今東西の美術品や工芸品がところ狭しとならべてある部屋をいくつもすぎると江戸時代の屏風や漆器などとともに何十点もの甲冑が展示されている部屋に行きついた。それまで見えてきた西洋の甲冑は防衛を目的とする徹底した機能本位の武器ではないのに、わが国の甲冑は工芸品として鑑賞するに耐え得る美術的価値をもっていた。それまで日本文化の特質をふかく考えることはなかったが、このときの印象があまり鮮明だったので帰国の折には甲冑に駆使されている漆芸と金工をぜひ見ることにしよう、そして日本文化特に美術工芸のことをもう少し自分なりに考えて私自身の頭のなかにある美術空間のなかにしかるべき位置づけをしようという心に決めた。

留学を終えて一年以上がたった春休みに輪島に出かけた。いくつかの工房をたずねて漆芸の技法を学ぶと同時に、会食用の漆器を見

つけるためである。技法に関してはとおい親戚が岩手一関の近くで秀衡塗りを作っていたので予備知識があったが、店にならぶ漆器の種類ゆたかさには圧倒されるほどであった。なかでも濃い朱塗りの会席盆にひきつけられたが、当時のわたしには高価すぎて迷っていると店の主人がこちらの予算を聞いてきた。正直に話すと新品は無理だが明治末期のものが蔵にあるのでそれを塗り直すといものになるとすすめてくれた。二、三ヶ月して届いた十八枚の会席盆の出来は期待以上で、いまでも正月などに使っている。

このときから工芸品、とくに伝統的な技法で作られる工芸品には大きな関心があり、なぜ近代化を果たし、先進国の仲間入りをした日本に伝統工芸がいまでもしつかり残っているのかを日本文化の中核において少しずつ考えてきた。このたび石川県立美術館で仕事ができることをとても感謝しており、この機会に伝統工芸を中心とする日本文化をしつかり研究したいと思っている。五十年近く昔の出会い以来の不思議なえにしを感じている。

## 主な出品作家

【文化勲章受章者】板谷波山、松田権六、蓮田修吾郎、二代浅藏五十吉、十代大樋長左衛門(陶冶齋)

【日本芸術院会員】富本憲吉、高村豊周、佐治賢使、三谷吾一、武腰敏昭

【重要無形文化財保持者】

初代魚住為楽、木村雨山、前大峰、水見晃堂、赤地友哉、隅谷正峯、大場松魚、寺井直次、西出大三、

羽田登喜男、川北良造、塩多慶四郎、三代徳田八十吉、前史雄、吉田美統、三代魚住為楽、中川衛、

小森邦衛、中野孝一、灰外達夫、山岸一男

※肩書が重複する場合は片方にのみ掲載しています。



十代大樋長左衛門(陶冶齋)《輪花「花器」》

# いしかわの工芸 文化の深み ~わざの美 表現の美~

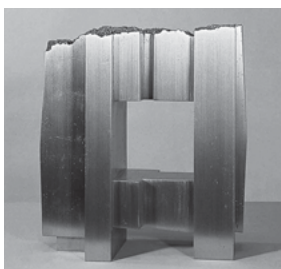
主催/石川県立美術館 後援/北國新聞社

11月8日(日)~12月20日(日) 会期中無休

## 学芸員の眼

今回の展示作品の中には実際に使われていたものもあれば、飾るためだけに作られたものもあります。現代において展覧会に出品するために作られるような工芸作品の多くは、鑑賞に主眼をおいたものであることが少なくありません。なかには、彫刻との線引きが難しいものもあります。何をもうて工芸とするのか。現代におけるその定義は、悩ましい問題です。

同じように意味が膨張している言葉に「アート」と「デザイン」があります。本来芸術の訳語であるはずの「アート」は、いまやより広い意味で「アートな体験」などと使われますし、「デザイン」は形あるものだけでなく、社会システムなどに使われる場合が増えていきます。膨張する「アート」と「デザイン」に対して、工芸はどう折り合いをつけていくのか。作品を前にしながら、考える日々です。



蓮田修吾郎  
《鑄鋼モニュメント「ある都市空間へ」》

美術館は絵を見るところ、そんな風に思っている方もいらっしゃるかもしれません。しかし全国には地域独自の文化を守っている美術館がたくさんあり、絵画だけでなくさまざまな分野の作品を展示しています。そして、石川県立美術館の大きな特色のひとつが、工芸のコレクションです。

石川県には、江戸時代から受け継がれてきた工芸の豊かな土壌があり、その土壌に深く根付いた文化があります。当館は、石川の文化の結晶である地域ゆかりの作家の作品や、縁あってこの地に集った工芸作品を六十一年の長きにわたって収集・保存してきました。どんな時代でも、この石川の地で作り続けられてきた工芸があります。厳しい時代だからこそ、文化の灯を絶やさない。そんな思いでいま、石川の工芸をご覧ください。

第一章「秋冬風景」は、季節に合わせた作品を選び、日本の風土に寄り添う工芸のあり方を感じていただきます。第二章「わざの美」は、日本伝統工芸展で活躍

した作家を中心とし、伝統のわざと現代的な感性が融合した工芸の美を、第三章「表現の美」は、日展を中心に活躍した作家の作品から、自己の想像力と工芸素材の相剋による表現をご覧ください。

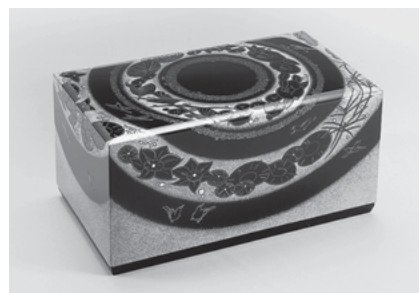
石川の工芸を代表する作家や、縁あって当館コレクションに加わった作家など、総勢八十六名による展示作品九十三点のうちには、近現代工芸分野の日本芸術院会員(前身の帝国美術院会員を含む)十四名と、重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)三十名の作品が含まれます。工芸の世界を通して、石川の文化の深みを感じ取っていただければ幸いです。

### ◆観覧料

一般…六〇〇円(五〇〇円)

大学生…五〇〇円(四〇〇円) 高校生以下無料

※( )内は、二十名以上の団体料金。当館友の会員と六十五歳以上の方は団体料金に割引。



大場松魚《平文輪彩箱》

# 加賀藩の美術工芸Ⅱ

11月19日(木)～12月20日(日) 会期中無休

## 学芸員の眼

これらを前田綱紀が入手するに至った経緯は不明ですが、『類聚国史』は公家である一条家や三条西家、壬生家にあつたことを記す十四～十六世紀の記録があり、綱紀は自らも持つにふさわしい「由緒」を求めたといえましょう。前田家の家祖を道真とするなら、なおさらです。

『類聚国史』をはじめ、古代に記された重要な典籍は、書き写されながら伝わるものの、中世の戦乱によって散逸します。近世に入り徳川家康や吉宗は写本の探索を行い、幕末には校訂『類聚国史』が刊行されますが、校訂にあたっては、より古い時代の写本が重要視されました。今回展示する『類聚国史』は、写本の中でもっとも古い「古本」で、平安時代末から鎌倉時代初期に書き写されたと思われます。

「加賀藩の美術工芸Ⅱ」では、国宝『類聚国史』から巻一六五と巻一七七を紹介します。

『類聚国史』とは、『日本書記』『続日本紀』など奈良平安時代につくられた六つの史書、通称「六国史」の記事を、編年体(年代順に記すこと)ではなく、内容によって分類編集した書物です。編者は菅原道真で、「神祇」「帝王」「後宮」「人」「歳時」「音楽」など十六部が今日確認されています。

巻一六五は「瑞祥」部の上にあたり、前半には「日」「月」「星」「雲」「雨」「露」「雪」といった天候に関する記載が並びます。太陽のまわりにかさができたこと、太陽の下の雲がまるで龍のようであったことなどと記されており、さまざまな自然現象が、吉祥の前兆として捉えられていたことがわかります。後半には「鶏」

「雁」「鷹」「雀」「鷹」などの鳥が、いつどこから献上されたかを記します。古代より鳥類はめでたい献上品として重宝されていたのです。

巻一七七は「仏道」部の上にあたり、「仁王会」「御斉会」「維摩会」など法会の記述が続きます。さまざまな法会は国家安泰を祈願するうえで、欠かせない行事でした。例えば、数年前から流行り出した疫病に悩まされた。例えば、数年前から流行り出した疫病に悩まされた。貞観七年(八六五)二月には、国が衰弊して長いことから、国を護り、民を安心させようと般若経を講ずべから、仁王会が催されたと記されています。

前田家は菅原道真を家祖としたことから、道真に係る文書典籍の収集に励みますが、古代の歴史書から治世者が学ぶべき事柄も多かったとかがえられます。



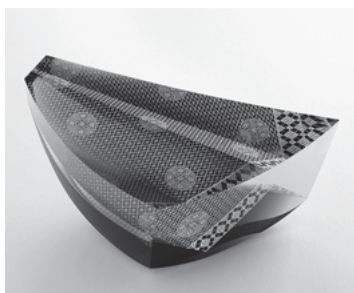
# きらめく美 北陸ゆかりの<sup>きりかね</sup>截金作家たち

11月19日(木)～12月20日(日) 会期中無休

## 学芸員の眼

出品作家のうち、現在も精力的に活動している山本茜は、ライフワークとして『源氏物語』のシリーズを制作しています。山本が私淑する西出大三もまた『源氏物語』をテーマとした連作があります。平安時代から鎌倉時代にかけて、仏教美術における截金装飾が最盛期であったことから、『源氏物語』と截金は、テーマとしての親和性が高いと言えるでしょう。

今回は同シリーズから『紅葉賀』と『空蟬』の二点を展示します。山本がガラス成形技術を学んだ、富山ガラス造形研究所の卒業制作が『紅葉賀』であり、截金ガラス作家としてのキャリアの始まりの作品です。対して『空蟬』は昨年制作され、本展が初めての展覧会出品となります。それぞれの表現の变化をお楽しみいただくとともに、作品に込められた「ものあはれ」をご堪能ください。



山本茜《源氏物語シリーズ 第三帖 空蟬》

六か月順延しての開催です。平安時代から鎌倉時代の仏教美術の装飾に用いられた「截金」技法を、表現の主体とする北陸ゆかりの三作家、西出大三(一九三〇～一九九五)と、高瀬孝信(一九三二～二〇〇二)、山本茜(一九七七)を紹介します。

截金とは金などの箔をごく細かい方形や、髪の毛よりも細かい線に切り、<sup>にがわ</sup>膠や布<sup>ふのり</sup>海苔で貼り付けて、光り輝く繊細な文様を構成する技法です。仏教美術における截金は、貴族社会の終焉とともに衰退し、京都の本願寺系仏画師の間に技法が継承されました。

截金に出会い、独学で技術を研究・習得した、いわば「門外漢」から道を究めた作家です。

齋田の高弟・高瀬の作品は、師譲りの端正な截金装飾に樹脂をコーティングし、上からさらに截金を施すという、独自の工夫がなされています。摩擦に極めて弱い截金を、長く遺すために考え抜かれた技法です。

江里に師事した山本は、截金の脆弱さの克服に加え、西出と同様に截金を施す土台も制作したいという思いから、ガラスの中に截金を封じ込める作品を創案しました。

截金という技法に魅せられ、技術を究めた三作家による、唯一無二の作品世界を感じ取っていただければ幸いです。



高瀬孝信《截金飾箱 花の城閣》 砺波市美術館蔵

## 第2展示室【古美術】

# 石川の文化財Ⅱ

11月19日(木)～12月20日(日) 会期中無休

文化財は我が国の長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産です。そしてそれを守り後世に伝えていくことは、今を生きる私たちの責任です。文化財を守るためには、日常の保存環境に気を配り、大切に扱うことが必要です。

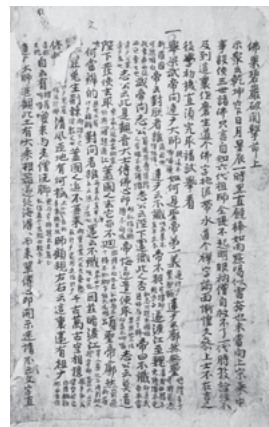
毎年十一月一日から七日は、「文化財保護協調週間」とされています。

石川県立美術館では、この時期、県内の寺社や個人からお預かりしている国宝・重要文化財などを一堂に展示することになっています。年に一度、公開することで国民共有の貴重な財産である文化財への理解と関心を深め、文化財保護への一層の協力をお願いする目的で開催するものです。

文化財では美術品に目が行きがちですが、歴史的な価値を持つ資料もまた重要です。第二期では金沢市長坂の大乗寺をはじめとする県内寺院に伝わる文化財を中心に公開します。大乗寺は「曹洞宗第二の本山」とも称されており、初めて永平寺以外の地で建てられた曹洞宗寺院です。永平寺三世の徹通義介が開山で、開祖道元ゆかりの文化財をその時もたらしめました。《佛果碧巖破擊節(一夜碧巖集)》は、入宋して

た道元が帰朝に際して、白山権現の助力を得て、一夜にて書写したと伝えられるもので、《碧巖集》の古型を伝えて貴重なものです。

本展ではほかに金蔵寺の《両界曼荼羅図》、如来寺の《阿弥陀三尊来迎図》など、石川の文化財を紹介します。



《佛果碧巖破擊節(一夜碧巖集)》

## 第3展示室【近現代絵画】

# 人物画の世界

11月19日(木)～12月20日(日) 会期中無休

本展では、石川ゆかりの日本画家、洋画家による人物画作品を紹介します。

日本画からは稲元実の《季節は終わりぬ》を紹介합니다。稲元は、昭和二十一年七尾市に生まれ、同四十四年武蔵野美術大学日本画科を卒業後、加藤東一に師事。日展を舞台に活躍し、家族をモデルとした私小説的な作品世界を展開します。作品に描かれるのは、メリーゴランドに座る少年と、その母を思わせる女性。遊園地に母子といえは楽しげな取り合わせのほゞですが、女性はうつむき、少年は無表情です。鑑賞者はこのアンバランスな取り合わせに物語を予感し、稲元の世界観に引き込まれていくのです。

油彩画からは、遠田運雄の《鑑賞家》を紹介합니다。遠田は明治二十四年金沢市に生まれ、東京美術学校

西洋画科に入学して岡田三郎助に師事。国民美術協会展や太平洋画会展に入選し、終戦後は京城帝国大学に講師として勤務します。大正十五年帝展に初入選し、昭和四年に渡欧。同五年にはサロン・ドートノンに入選し、同二十五年には日展審査委員長に就任します。その後は金沢大学教授、金沢美術工芸短期大学講師を務め、多くの後進を指導しました。《鑑賞家》からは、人物画における対象表現や空間描写のみならず人間の内面世界や心象風景をも追求した、遠田の直向な制作態度が伺えます。

今回、優れた人物画作品の数々から、作品に宿る世界観や時代性、さらには時代を超えた人間描写の普遍性を鑑賞いただければと思います。



遠田運雄 《鑑賞家》

## 第4・6展示室【近現代絵画・彫刻】

# 優品選

11月19日(木)～12月20日(日) 会期中無休

兼六園周辺文化の森もめつきり秋が深まってきま  
した。晩秋から初冬の金沢は、ぜひ美術館で芸術に  
浸っていただきたい思います。

四季の変化が豊かなわが国では、テーマの土台に  
季節が据えられている日本画作品が多く存在しま  
す。それも盛夏や真冬など季節のど真ん中よりも、秋  
から冬への変わり目や、春の兆しを感じられる頃に  
取材した優品が多く見られます。荒木弘訓《野》に描  
かれるのは、冬枯れの野に二頭の犬。厳しい冬の到来  
を予感させます。

油彩画からは清水鍊徳《精進湖富士》を紹介しま  
す。清水は明治三十七年小松市に生まれ、西洋画を岡  
田三郎助に師事します。白日会展などに出品を重ね、  
昭和七年《ニコライ堂を望む》で独立展に初入選して  
以降、同展を舞台に活躍します。日本的フォーヴィス

ムと呼ばれる、主観的な自然観賞による風景描写に  
特徴があります。

彫刻からは重田照雄《時の流れの中で'88'》を紹介  
します。本作は、アルミ合金の板を帯鋸(帯状のかた  
ちをしたのこぎり)で切り抜いた本体に、プレス機で  
曲げて作ったパーツをボルトで取りつけて構成して  
います。アルミ板のかたちの面白さに加え、リズミカ  
ルなボルトの配置もポイントになっ  
ています。

素描・版画では、シルクスクリーン  
の作品、横尾忠則の《Tarzan I》、  
木版画の作品、畦地梅太郎の《よろこ  
びの顔》など、それぞれの技法を生か  
した、色彩も鮮やかな人物をテーマと  
した作品を展示いたします。



重田照雄《時の流れの中で'88'》

## 11月前半の展覧会

11月3日(火・祝)まで

・第六十七回 日本伝統工芸展 金沢展

11月15日(日)まで

・特別陳列 加賀藩の美術工芸 I 【前田育徳会尊經閣文庫分館】

・石川の文化財 I 【古美術】

・優品選 II 【近現代工芸】

・日本画のてびき 技法、趣向、エトセトラ 【近現代絵画】

・優品選 【近現代絵画・彫刻】

## 11月の行事予定

■土曜講座	13時30分～15時	美術館ホール	無料
14日(土)	国宝《色絵雉香炉》を読み解く	担当課長 村瀬博春	
21日(土)	西出大三の截金研究	担当課長 寺川和子	
■映像ギャラリー	14時30分～15時30分	美術館ホール	無料
8日(日)	「シリーズ北陸の工芸作家 石川の匠たち 即是色 人間国宝三代徳田八十吉(24分) 「シリーズ北陸の工芸作家 石川の匠たち 土火の祈り 大樋焼十代大樋長左衛門(23分)」		
■O才からのファミリー鑑賞会オンライン	各回①10～11時、②14～15時		無料
20日(金) 23日(月祝)	今年度はオンラインで開催します。詳しくは当館公式ウェブサイト内「キッズプログラム」のページをご覧ください。 <a href="http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/jpc/exev/?sp=kids">http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/jpc/exev/?sp=kids</a>		



## 《道化》 どうけ

161.0cm×161.5cm  
昭和56年(1981)

坂根克介 さかね・かつすけ

昭和20年(1945)～



日本では、特に近世以降「見立て」という表現が多用され、それを受け入れてきた文化と土壌があります。例えば、竜安寺の石庭が白砂を雲海に見立て、大小の岩で山や禅の世界を表していることは周知の通りです。もっと身近な例では、桜の花びらを雪に見立てた「桜吹雪」という言葉も「見立て」のうちでしょう。もちろん西洋にもキリスト教絵画のアトリビュート(持物)に見られる比喩や象徴はありますが、日本の「見立て」には遊び心がその根っこにあるようです。

さて、本作《道化》もその姿は道化師ですが、何かに見立てているとすればそれはなんでしょうか。三方を向いた顔と印象的な細長い腕。その姿はあの《阿修羅像》を見立てているようです。しかし、一つの体に三つの顔、六本の腕を持つ仏像ほどの異形ではなく、三人の人物がそれぞれポーズを取っています。さらによく見ると三人はよく似た顔をしており、実は一人の人物であるとの見方もできます。そして正面のりこーダーを吹く少年の姿は輪郭を失い、あたかも道化師と同化しているようです。本作の「見立て」遊びから見る者を引き込み、さらに内面世界へと誘う手法は見事です。

作者、坂根克介は昭和四十四年に金沢美術工芸大学の日本画を卒業し、西山英雄に師事。人物を正面からとらえる構図と、比喩やユーモアを秘めた人間性に迫る作画で日展の第一線に躍り出ました。近年はそこに装飾性を加えた表現を展開しています。

## 次回の展覧会

令和3年1月4日(月)  
～2月7日(日)  
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室	
新春優品選		新春優品選	
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	新春優品選 【近現代工芸】	書をあじわう 【近現代書】	花木にみる 日本美の心

## ご利用案内

## コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※( )内は団体料金

11月2日は第1月曜日より  
コレクション展示室無料の日

## 11月の開館時間

午前9:30～午後6:00

## カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00 年中無休

11月は無休で開館していません

## 「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、  
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った  
知名度向上県立美術館発行の  
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F  
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索石川県立美術館だより  
第445号(毎月発行)  
2020年11月1日発行  
〒920-0963  
金沢市出羽町2番1号  
Tel:076(231)7580  
Fax:076(224)9550  
URL <http://www.ishiki.pref.ishikawa.jp/>石川県立美術館は電源立地地域対策  
交付金を活用して運営しています。